

人ノ癌及ビ其他腫瘍ト「イムペジン」現象

京都帝國大學醫學部外科學研究室(鳥瀉教授指導)

大學院學生 醫學士 平 尾 猛

Erforschung des Impedins bei Karzinomen und sonstigen Neoplasmen des Menschen.

Von

Dr. T. Hirao.

[Aus dem Laboratorium der Kais. Chir. Universitätsklinik Kyoto
(Direktor: Prof. Dr. R. Torikata).]

Wir haben native sowie abgekochte Extrakte von verschiedenen chirurgisch entfernten Neoplasmen des Menschen (vgl. Tafelfiguren 1-11) auf ihre die Phagozytose fördernde Wirkung geprüft und die in Fig. 1-14 angegebenen Resultate erhalten (vgl. Fig. 1-14 im Text).

Zusammenfassung.

- 1) Karzinome ergaben gar keine Spur der Impedinerscheinung.
- 2) Das Epulis bei einem 14-jährigen Mädchen erwies sich als impedinhaltig. Die kirschgrosse, runde, etwas gestielte Geschwulst bestand dabei teils aus gewucherten Pflasterepithelien in Zapfen und teils aus sarkomatöser Zellwucherung, wie dies aus Tafelfigur 9 hervorgeht.
- 3) Aus der positiven Impedinerscheinung bei Epulis geht die Sarkomnatur dieser Geschwulst hervor.
- 4) Die sonstigen zu gleicher Zeit untersuchten sicher infizierten Gewebesäfte ergaben ausnahmslos die Impedinerscheinung.
- 5) Aus dem negativen Befunde des Impedins bei Karzinomarten müssen wir die Ursache der Karzinome als eine mikrobiotische Infektion ablehnen. (Autoreferat)

緒 言

余等ハ曩ニ人ノ各種肉腫ガ強度ニ喰燼作用「イムペジン」現象ヲ示スコトヲ立證シ、從テ其發生原因ハ1種ノ微生物デナクテハナラヌト述ベタ。

茲ニハ更ニ人ノ癌腫及ビ其他ノ腫瘍ニ就キ研究ノ結果ヲ報告シ、肉腫トノ對照ニ供シヨウ。

檢 査 材 料

1, 黃色葡萄狀球菌液, 可檢液及白血球液ニ就テハ前報告(日本外科實函第10卷第4號第874頁)ニ述ベシト同一。

2. 可檢材料 患者片木(副腎癌及轉移)。山本(甲狀腺癌), 香山(上顎癌), 中川(上顎癌), 馬場(扁平上皮癌), 山村(胃癌及轉移), 花手(上顎癌), 仙元(「エプーリス」)岸本(結核性淋巴腺炎), 原田(出血性睪丸炎), 今井(結核性副睪丸炎)ヨリ得タル腫瘍組織。

檢 査 方 法

肉腫ノ場合ト同一ナリ。(日本外科實験第10卷第4號第874頁参照)

檢 査 結 果

検査結果ハ第1表及ビ第1圖乃至第14圖ニ示サレタリ。

第 1 表 各種腫瘍浸出液(生・煮)ノ正常喰菌作用能働力(喰菌子)ノ比較
(N=生浸出液, K=煮浸出液)

患 者	年 齡	病 名	生, 煮 別	抗 原 量				對 照 食鹽水
				0.1坵	0.2坵	0.4坵	0.6坵	
片木榮之助	38	原 發 副 腎 癌	N K	61 63	75 67	100 62	64 42	21
同 人		骨 轉 移 性 副 腎 癌	N K	95 60	94 62	100 60	87 59	42
山本四郎衛門	56	原 發 甲 狀 腺 癌	N K	88 71	86 74	100 79	67 66	32
香山藤作	70	上 顎 癌 腫	N K	70 41	80 70	100 93	99 76	34
中川ナカ	51	同 上	N K	68 49	100 35	76 49	71 47	40
馬場長作	68	口腔粘膜扁平上皮癌	N K	81 57	88 68	100 76	73 58	29
山村コヨシ	48	胃 癌	N K	100 55	76 66	73 51		
同 人		同 上 轉 移	N K	100 87	96 74	70 39		
花手藤作	51	上 顎 癌 腫	N K	100 87	94 71	84 69		
仙元ツヤ	14	「エプーリス」	N K	50 51	77 84	76 100	46 87	32
岸本キミ	22	顎 腺 結 核	N K	47 83	41 91	47 100	33 76	45
原田雪三郎	36	出血性睪丸炎血性膿	N K	59 63	75 96	67 100	60 93	33
同 人		同上睪丸軟化部	N K	50 91	60 98	59 100	48 60	35
今 井 弘	18	結 核 性 副 睪 丸 炎	N K	35 53	54 67	54 100	40 65	21

Fig. 1. Epinephrom

第1圖 原發副腎癌 (片木榮之助)

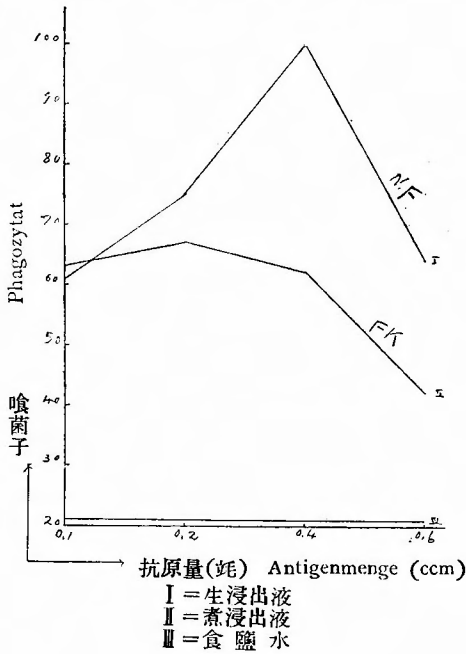


Fig. 2. Metastase des Karzinoms

第2圖 轉移癌 (片木榮之助)

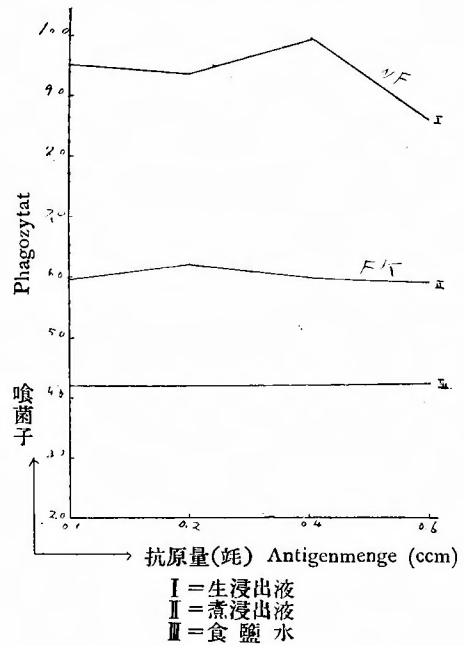


Fig. 3. Struma maligna.

第3圖 原發甲状腺癌 (山本四郎右衛門)

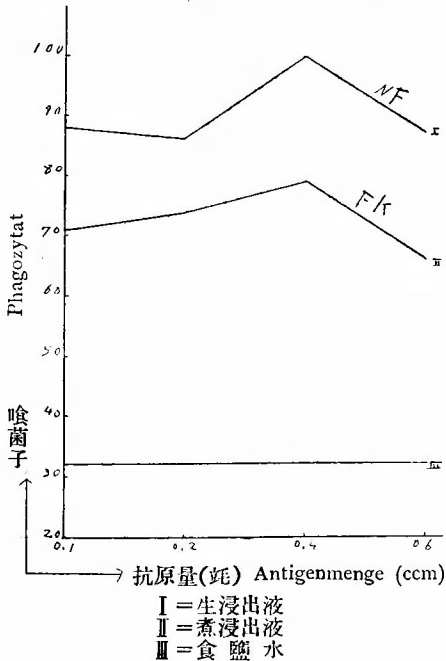


Fig. 4. Oberkieferkrebs

第4圖 上顎癌腫 (香山藤作)

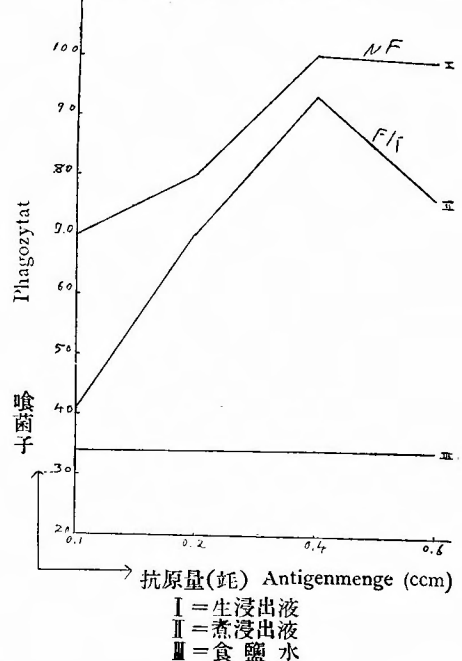


Fig. 5. Oberkieferkrebs
第5圖 上顎癌腫 (中川ナカ)

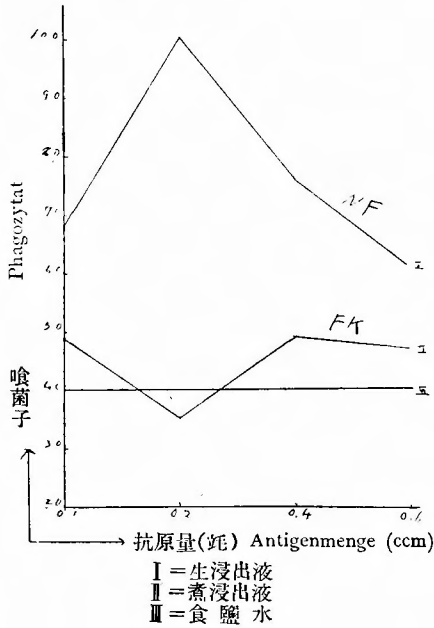


Fig. 6. Plattenepithelkrebs aus
Mundschleimhaut
第6圖 口腔粘膜扁平上皮癌 (馬場長作)

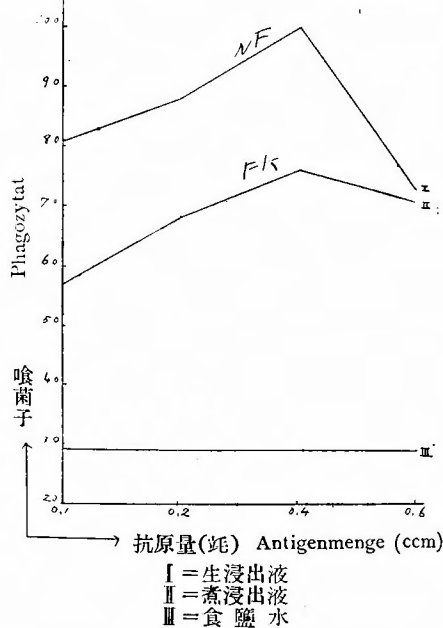


Fig. 7. Magenkrebs.
第7圖 胃癌 (山村コヨシ)

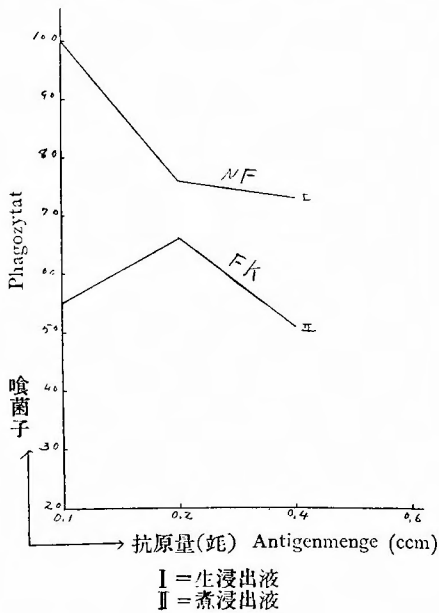


Fig. 8. Metastase des Magenkarzinoms
第8圖 轉移癌 (山村コヨシ)

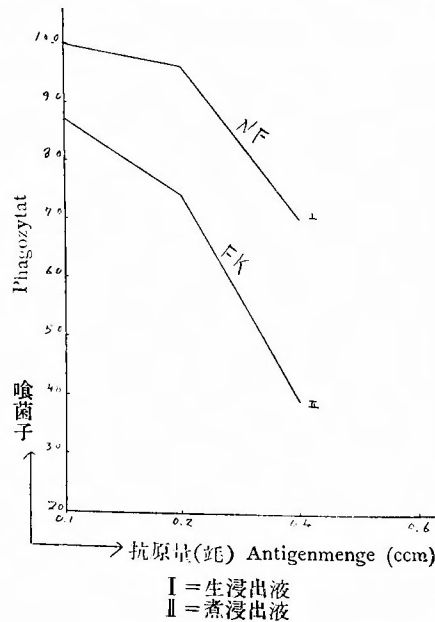


Fig. 9. Oberkiefekrebs.

第9圖 上顎癌腫 (花手藤作)

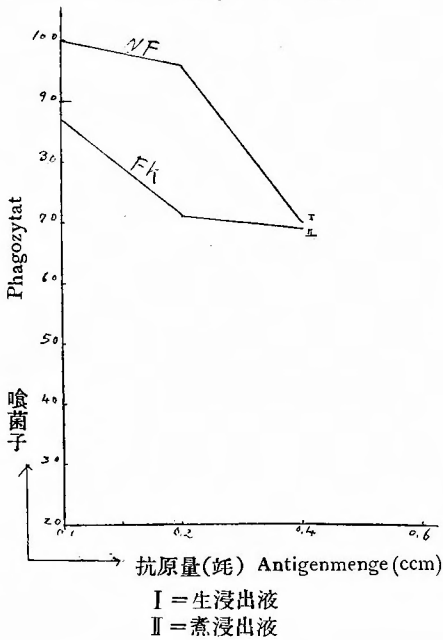


Fig. 10. Epulis.

第10圖 エプーリス⁷(仙元ツヤ)

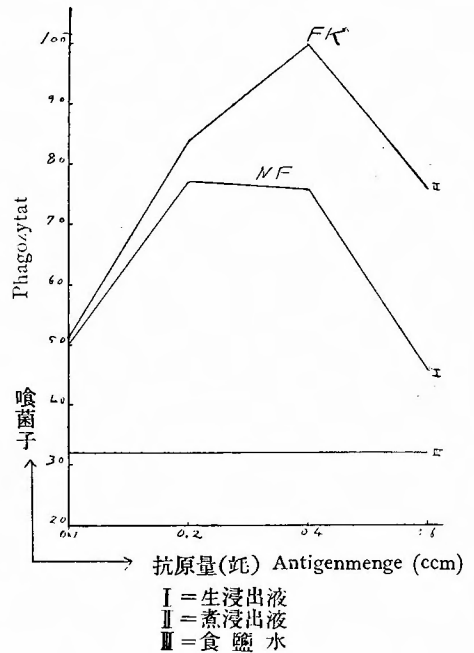


Fig. 11. Lymphadenitis colli tuberculosa.

第11圖 結核性淋巴腺炎(頸腺)(岸本キミ)

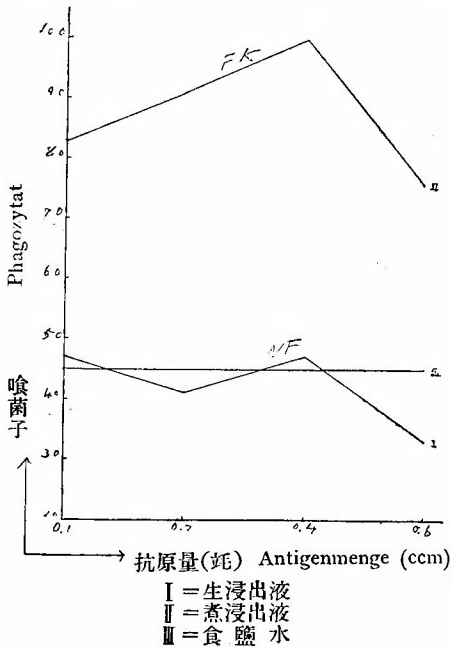


Fig. 12. Orchitis purulenta haemorrhagica

第12圖 出血性睾丸炎血性膿(原田雪三郎)

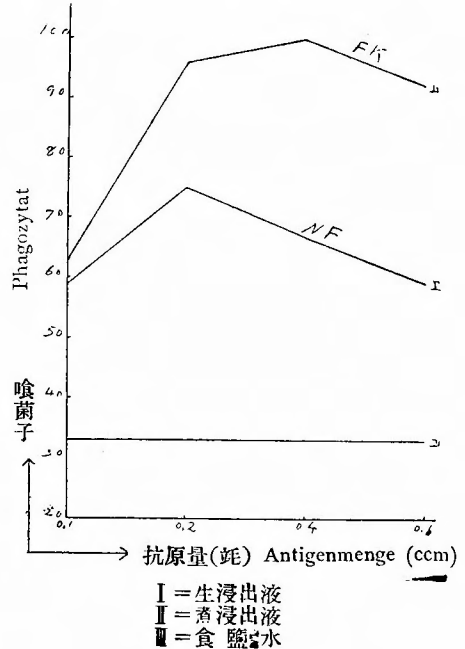


Fig. 13.

第13圖 出血性睾丸炎睾丸軟化部(原田雪三郎)

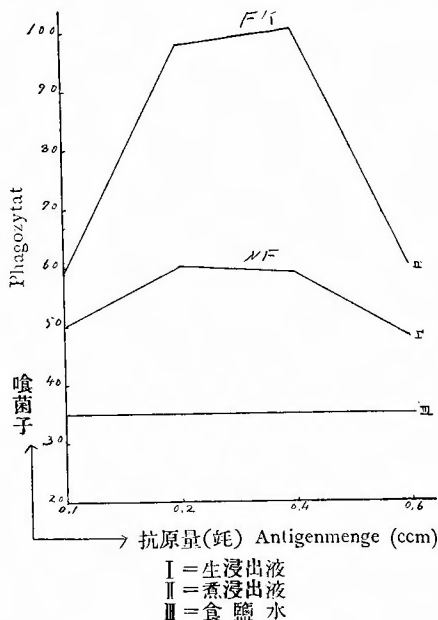
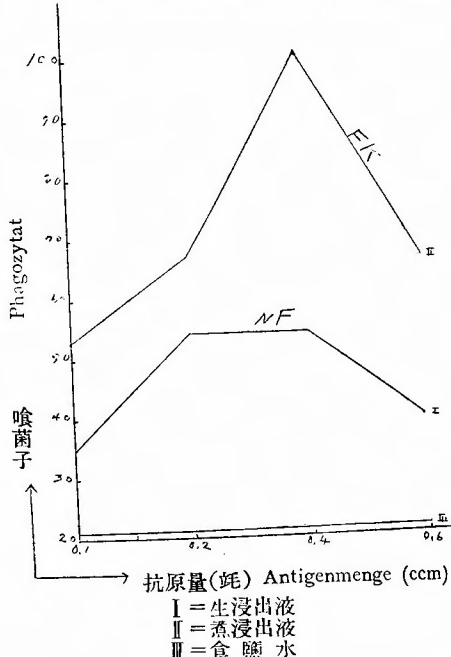


Fig. 14. Nebenhodentuberkulose.

第14圖 結核性副睾丸炎(今井弘)



所見總括及討究

癌腫ハ取除ケナシニ Γ イムベヂン Γ 現象ガ全部陰性デアル、即チ癌腫ヲ構成スル蛋白體ハ正常蛋白體ト同様ニ、煮沸ニヨリ抗原能力ガ著ク減弱スル。

然ルー Γ エプーリス Γ ハ他ノ細菌性病的組織乃至肉腫ト同様ニ Γ イムベヂン Γ 現象強度陽性デアル。組織標本デハ Γ エプーリス Γ ハ Γ エビテル Γ 細胞ト間質結締組織トヨリ構成サレテ居ル(寫眞第9圖参照)ガ、 Γ イムベヂン Γ ガ明白ニ存在スルコトヨリスレバ、癌腫性デナクシテ、肉腫性ト考フベキデアロウ。

茲ニ面白イノハ、患者山村(病歴参照)ノ胃ニハ癌腫ガ出来テキテ、淋巴腺ノ腫瘍ハ轉移癌デナケレバナラス。鏡檢スルト原發病竈ハ立派ナ癌腫デアルガ、淋巴腺ノ轉移ハ宛モ肉腫ノ感ヲ呈シテキル。サテコレガ果シテ肉腫デアルナラバ從來ノ検査ノ結果カラ考ヘテ Γ イムベヂン Γ 現象ヲ示サネバナラス。斯様ナ場合ニ Γ イムベヂン Γ 現象ノ有無ヲ検査スル事が、問題トナツテ居ル腫瘍ガ、果シテ肉腫デアルカ否カノ鑑別診斷上、興味アルコトトナルノデアル、而テ検査ノ結果ハ Γ イムベヂン Γ 現象ガ陰性デアツタ。

故ニコレハ細胞ノ變形シタモノデ、Metamorphose デハアルガ、矢張癌腫轉移ニ相違ナイコトガ明白トナツタノデアル。

此ノ如ク Γ イムベヂン Γ 現象ノ有無ヲ検査スルコトハ、今日デハ腫瘍ノ組織學上ノ診斷ヲ

調理シ得ルガ如キ有様ニマデ進歩シ來ツタノヲ覺ユルノデアル。

患者病歴

1. 片木榮之助 38歳 副腎癌 昭和7年1月7日入院。

既往症 生來健康ニシテ花柳病ヲ知ラズ。

現症 昨年6月何等誘因無クシテ、發作性ニ一過性ノ血尿ヲ來シタルモ、痼痛ヲ缺キタリ。其後1ヶ月程便秘ト下痢トガ交互ニアリシモ、苦痛無カリキ。然ルニ同年8月下旬ニ至リ歩行ニ際シ、左下腹部ニ鈍痛ヲ來シ、該部ニ腫瘍アルコトヲ氣付キタリ、約2週間前ヨリ急ニ腫瘍ノ大サヲ増シ運動ニ際シ鈍痛アリ。睡眠食欲トモニ佳良ナリ。

局所々見 腹部ハ一般ニ膨隆セルモ、腸蠕動、搏動ヲ認メズ。觸診スルニ視診ト一致シテ、1ツノ腫瘍ヲ觸ル、上方ハ肋骨弓ニ隱レ、下方ハ臍ノ高サヨリ2横指上方、内側ハ副胸骨線、外方ハ前腋窩線ニ及ビ小兒頭大ニシテ、呼吸ニ際シヨク移動シ、肋骨弓下ニ指尖ヲ入レ腫瘍ヲ固定シ得。腫瘍面ハ凹凸不正、彈性硬ニシテ、壓痛ヲ缺ク、打診スルニ腫瘍ニ一致シ濁音ヲ呈シ、肝、肺ノ境界ハ乳線上第7肋骨ノ高サニアリ、體位變更ニ依リテ腫瘍ノ位置ハ變化セズ。他方ノ腎臟及ビ脾臟ヲ觸レズ。腹水ヲ證明セズ。膀胱鏡検査ニ依リ右腎ノ機能ハ、左腎ニ比シ著シク減退セリ。

手術 1月20日右腎別出術ヲ受ク。

腫瘍鏡檢 副腎癌(寫真圖版第1圖參照)

2. 同人 轉移癌。

昭和6年12月25日頃ニ右薦腸縫隙ノ上方ニ、疼痛ヲ來シ、次第ニ其度ヲ増シ、1月20日腎臟別出術ヲ受クル前ニハ一層激痛ニ惱ミタリシモ、術後輕快セシガ、1週間ニシテ再び疼痛ヲ覺ヘ、1月30日ニハ腸薦縫隙上方ニ腫瘍ノ有ルコトヲ知ル。該腫瘍ハ次第ニ増大シ、2月7日頃ニハ尾骶骨ニモ壓痛ヲ來ス。

局所々見 上述腫瘍ハ直徑約1握ニシテ搏動性ナリ。マタ壓縮性アリ。皮膚ニ靜脈怒張及ビ發赤等ヲ認メズ。

第2回手術 2月10日該腫瘍ノ全剔出(附近ノ筋肉及ビ骨ノ切除)ヲ受ク。

腫瘍鏡檢 副腎癌(寫真圖版第2圖參照)

3. 山本四郎右衛門(寫真業) 56歳 甲狀腺癌 昭和6年12月11日入院、7年1月23日退院。

主訴 頸部ノ腫瘍。

現症 昭和6年9月頃感冒ニテ少シク音聲啞レ、同時ニ頸部ノ前右方ガ一般ニ少シク腫脹セルコトヲ知ル。其頃又上搏ニ波及セル_L引ツル₇感ヲ生ジ、運動後ニハ心悸昂進ヲ來セリ。風邪ノ感ハ去リシモ上述ノ症狀ハ去ラズシテ、腫瘍ハ増大セリ、然シ壓痛無シ。食欲ハ普通ナリシモ少シク羸瘦セリ。

局所々見 前頸部右側ニ腫瘍有リ、大サハ横徑6握、短徑5握ニシテ、喉頭ハ左方ニ壓迫セラレタリ。腫瘍ハ嚥下運動ト共ニ移動シ、皮膚ニ異常着色及ビ皮下靜脈怒張ヲ缺ク、熱感無ク彈性硬ニシテ外側ニ胸鎖乳頭筋ヲ觸レ、多少下床ト癒着シ、搏動、壓痛ヲ缺ク。

手術 12月16日剔出術ヲ受ク。

腫瘍鏡檢 甲狀腺癌(寫真圖版第3圖參照)

4. 香山藤作(農) 左上顎癌 昭和7年1月25日入院。

主訴 左眼瞼下腫脹。

現症 昨年10月來、左眼瞼下ニ豌豆大ノ無痛性腫脹ヲ生ジ、漸次増大シ、壓痛アリ、1ヶ月後ニハ左鼻道ハ閉塞シ、左眼裂ハ自然ニ閉ヂタルモ、自ラ開クコトヲ得。然レドモ視力ハ消失セリ。

局所々見 左眼瞼下ニ1ツノ腫瘍有リ、約鵝卵大、其部ノ皮膚ハ赤ク光澤ヲ帶ビ、凹凸有リ、左鼻唇溝ハ消失ス。左眼球ノ運動ニ障礙ヲ認メズ。左鼻孔ニテハ峽部ガ外側ニ隆起シ、壓痛有リ、此部ニ

テ鼻孔殆ソド閉塞セラル。彈性硬ニシテ、不斷ニ漿液狀液ヲ流出ス。

手術 2月1日ニ上顎骨切除術ヲ受ク。

腫瘍鏡檢 癌腫(寫眞圖版第4圖參照)

5. 中川ナカ(菓子商) 51歳 上顎癌 昭和7年2月20日入院。

主訴 左觀骨附近ノ無痛性腫瘍。

遺傳關係 父ハ腸癌ニテ死亡ス。

既往症 15年前ヨリ齒痛ニ惱ミ、32歳ノ時3個拔齒セラレタリ。

現症 一昨年3月左頰部ニ刺スガ如キ疼痛ヲ來シ、左顳顬部ニ波及ス、カカル症狀ハ同年11月頃マデ續キタリ。昨年2月28日ニハ誘因無ク、衄血有リ、同年10月頃迄續キタリ。昨年12月16日ニ左頰ガ腫脹スルニ至リテ疼痛ハ去リシモ、腫脹ハ増大シ、時々複視ニ惱ムニ至ル。睡眠良好。便秘ニ傾ク。

局所々見 左頰骨ノ附近ガ一般ニ腫脹シ、反對側ニ比シテ約2倍。皮膚ニ光澤有リテ、眼裂ハ小ナリ。顔面神經麻痺及ビ眼球突出ヲ缺ク。觸診スルニ彈性硬ニシテ最モ隆起セル部ニ波動ヲ證明ス。表面ニハ凹凸アリ。壓痛、搏動ヲ缺ク。

手術 2月24日上顎骨切除術ヲ受ク。

腫瘍鏡檢 癌腫(寫眞圖版第5圖參照)

6. 馬場長作 68歳 扁平上皮癌 昭和7年2月29日入院。

遺傳關係 父ハ胃癌ニテニテ死亡ス。

既往症 生來健康、21歳ノ時淋疾ニ罹ル。

現症 一昨年春何等ノ誘因無クシテ、右側下方第1小臼齒ニ接スル頰粘膜ニ、帽針頭大ノ表皮剝離部ヲ生ジ、次第ニ擴大シテ、口角ニ現レ、昨年10月頃ヨリ著明ナル潰瘍トナル。自發痛ハ輕微、頰下ニモ拇指頭大ノ腫瘍ヲ認ム。咀嚼運動妨ゲラル。

局所々見 左口角ニ鶏卵大ノ腫瘍有リ、表面ハ花椰菜狀ヲ呈シ、健康ノ皮膚トハ境界鮮明、潰瘍ニ治癒傾向無ク、潰瘍面ニハ豌豆大ヨリ帽針頭大ノ肉芽ヲ認ム。觸診上熱感無ク、彈性硬、指壓ニヨリ潰瘍面ヨリ牛乳様小點滴ヲ證ス。潰瘍ノ周邊ニハ黑褐色ノ壊死部ヲ認ム。2個ノ淋巴腺ガ右側胸鎖乳頭筋ノ内側ニ於テ豌豆大ヨリ小指頭大ニ腫脹シタリ。

手術 3月2日切除術、次デ翻轉法ニ依リ移植術ヲ受ク。

腫瘍鏡檢 扁平上皮癌(寫眞圖版第6圖參照)

7. 山村コヨシ(農) 48歳 胃癌及膽石症。

主訴 下腹部ノ痙攣性發作及ビ右下腹部ノ無痛性腫瘍。

現症 6歳頃ヨリ春秋2回程下腹部ニ痙攣發作ヲ來シ、發作ノ度毎ニ惡感戰慄ヲ伴フ、疼痛ハ背部、右肩胛部ニ波及シ、嘔吐、嘔氣ハ有リタルモ、黃疸ヲ缺キタリ。約2ヶ月前ノ發作時ニ、右下腹部ニ小兒頭大ノ腫瘍ガ有ルコトヲ知リタリ。吐物ハ咖啡様ノコト無ク、又血尿ノ出デタルコトモ無シ。便通1日1回、睡眠良好。

局所々見 腹部ハ輕度ニ膨隆シ、右下腹部ニ小兒頭大ノ隆起有リ、該部ノ皮下靜脈ハ怒張セズ又腸ノ蠕動ヲ認メズ。腫瘍ト周圍トノ境界ハ明白ニシテ、呼吸ニヨリヨク移動シ、呼氣ニ固定スルコトヲ得。其表面ニハ凹凸有リテ彈性硬、腹水ハ證明セラレズ。

手術 昭和7年4月20日、腫瘍トトモニ胃ノ一部、上行結腸及ビ横行結腸ノ切除後、胃空腸吻合及、廻腸結腸吻合術ニ次イデ膽石除去術ヲ受ク。(「イムペヂン」検査組織ハ10%「フォルマリン」水没潰腫瘍ヨリ切除シタリ)

腫瘍鏡檢 癌腫(寫眞圖版第7圖及ビ第8圖參照)

8. 花手藤作 51歳 上顎癌 昭和7年6月11日入院、同年6月25日退院。

主訴 疼痛性上顎骨腫瘍。

現症 昨年8月頃誘因無クシテ、右側ノ上小白歯部ニ疼痛ヲ來シ、10月頃ヨリ少シク臭氣アル膿ト血液トノ混ジタル鼻汁ヲ分泌スルニ至リタリ。12月5日ニ上述ノ第1、2小白歯、第1大白歯ノ抜歯ヲ受ケタル後ニ搏動性疼痛ヲ來シ、本年1月中旬ニ硬口蓋ノ右側部ガ腫脹シ、自潰シテ出血セル後ニ瘻孔ヲ生ジテ今日ニ至リタリ。

局所々見 右眼下部ハ鶏卵大ニ腫脹シ、周圍トノ境界ハ不明ニシテ、該部ノ皮膚ハ少シク發赤ス。熱感無ク、彈性硬、硬口蓋ノ右側部ニ瘻孔アリテ、其ノ肉芽組織ヨリ出血シ易ク、消息子ヲ瘻管ニ通ジテ検査シタルニ、約3種ニシテ肉芽面ニ達シタリ。鼻道ハ全ク閉塞セリ。

手術 6月15日上顎骨ノ切除術ヲ受ク。(Lイムペデン⁷検査組織ハ10%Lフォルマリ⁷ン浸漬腫瘍ヨリ切除ス)

腫瘍鏡檢 癌腫。

9. 仙元ツヤ(麵類業) 14歳 Lエプーリス⁷ 昭和7年6月17日入院同年6月23日退院。

主訴 上齒齦部腫瘍。

現症 昨年11月頃、右側ノ上門齒ノ齒齦中央部ニ米粒大ノ腫瘍生ジ、次第ニ増大シテ、小指頭大ニ達セルヲ以テ、齒科醫ニヨリ切除ヲ受ケタルモ、數日後再發シ次第ニ増大シ、今日ニ至リタリ。

局所々見 右側ノ上門齒及び犬齒ノ齒齦ニ、茸狀拇指頭大ノ腫瘍アリ。其表面ハ鮮紅色後方諸處ニハ纖維素様皮膜ガ附着シタリ。表面ニハ多少ノ凹凸有ルモ、搏動無ク、一般ニ彈性軟ニシテ、波動ヲ證明セズ。強壓ニヨリテ出血シ、骨トハ各方向ニ比較的ヨク移動ス。

手術 6月20日腫瘍剔出及ビ骨膜搔爬ヲ受ク。

腫瘍鏡檢 Lエプーリス⁷(寫眞圖版第9圖參照)

10. 岸本キミ(學生) 22歳 結核性淋巴腺炎。

既往症 20歳ノ時右側肋膜炎ニ罹リ、1ヶ月ニテ治癒シタリ。

現症 昨年2月頃、左耳殻後下方ニ無痛性ノ腫瘍生ジ、次第ニ増大シ、且ツ兩側胸鎖乳頭筋ニ沿フテモ亦タ同様腫瘍生ジタリ。

手術 2月26日剔出術ヲ受ク。

腫瘍鏡檢 結核性淋巴腺炎(寫眞圖版第10圖參照)

11. 原田雪三郎(鉸業) 36歳 出血性陰囊水腫。

主訴 兩側陰囊腫脹。

既往症 生來健康ニシテ、花柳病ヲ知ラズ。

現症 凡15年前ヨリ兩側陰囊ガ腫脹シ、約1ヶ月前ニ、惡寒熱發ノ後、右睾丸ニ壓痛ヲ來シ、急激ニ増大シタリ。

局所々見 右陰囊ハ小兒頭大ニシテ、表面ハ平滑、皮膚ニ發赤ヲ示シ、熱感有リ、先端ニ近ク波動ヲ認ム。此部ヲ穿刺シタルニ血性膿ヲ得タリ。睾丸ノ感覺ハ全ク消失シ、光線ハ透過セズ。左陰囊ハ鶏卵大ニシテ至ル處ニ波動有リテ、光線ハコレヲ透過ス。兩側副睾丸ハ肥厚セズ。

手術 昭和7年4月13日睾丸剔出術ヲ受ク。

腫瘍鏡檢 出血性睾丸炎。

12. 今井弘(農) 18歳 結核性副睾丸炎。

主訴 右睾丸ノ腫脹。

遺傳關係 叔母ノ1人ハ肋膜炎ニ罹リタリ。

現症 昨年9月頃誘因無クシテ、右陰囊ガ腫脹シ、次第ニ増大シテ、自發痛ヲ來スニ至リタリ。盜

汗無ク、食慾良好。

局所々見 右側陰囊ハ左側ノ3倍大ニシテ、彈性硬、睾丸ノ感覺ヲ消失シ、主副睾丸ヲ區別シ難ク、表面ハ平滑ナリ。腹部ニハ、臍部ノ右上2横指ノ深部ニ、鰕卵大、彈性硬ノ壓痛性腫瘍ヲ認メタリ。

手術 昭和7年3月30日睾丸別出術ニ次イデ、後腹膜淋巴腺別出術ヲ受ク。

腫瘍鏡檢 結核性副睾丸炎(寫眞圖版第11圖參照)

第1圖 原發副腎癌 (片木榮之助)

第4圖 上顎癌腫 (香山藤作)

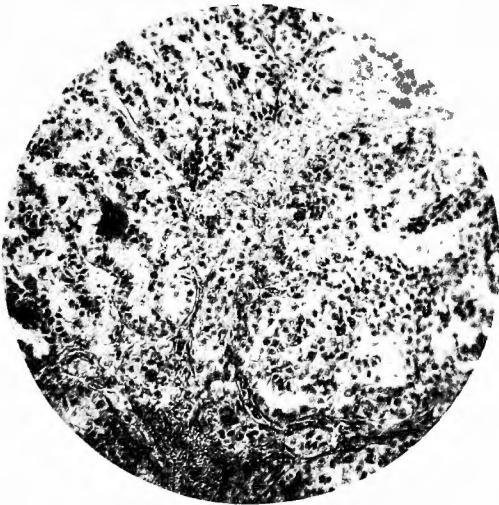


Fig. 1. Epinephrom.
Leitz Oc. 3, Obj. 4.

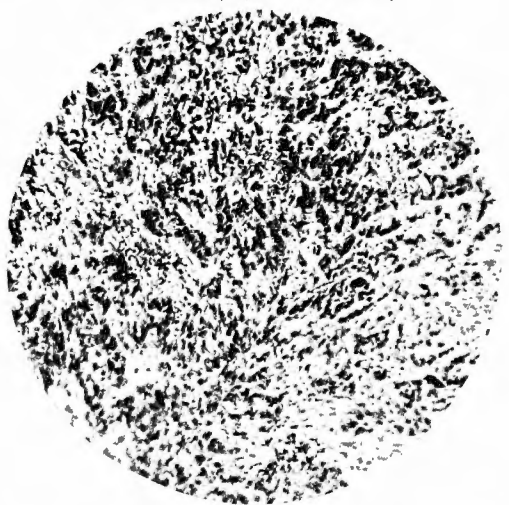


Fig. 4. Oberkieferkrebs.
Leitz Oc. 3, Obj. 4.

第2圖 骨轉移性副腎癌 (片木榮之助)

第5圖 上顎癌腫 (中川ナカ)

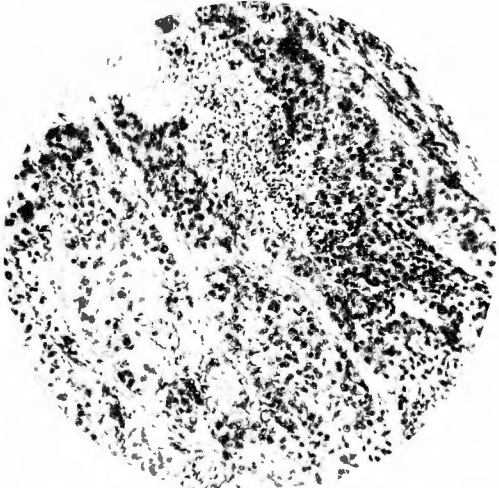


Fig. 2. Epinephrom, Knochenmetastase.
Leitz Oc. 3, Obj. 4.



Fig. 5. Oberkieferkrebs.
Leitz Oc. 3, Obj. 4.

第3圖 原發甲狀腺癌 (山本四郎衛門)

第6圖 口腔粘膜扁平上皮癌 (馬場長作)

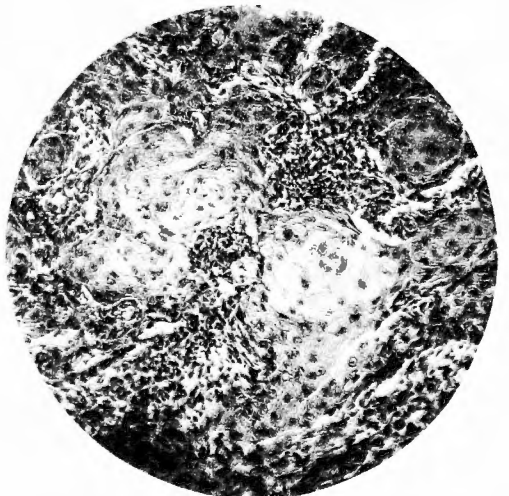
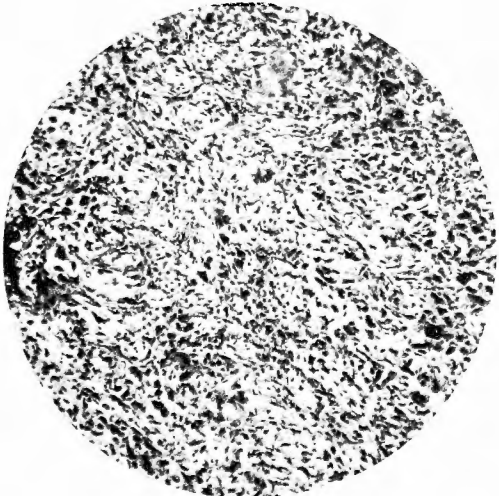


Fig. 6. Platteneithelkrebs aus Mundschleimhaut.
Leitz Oc. 3, Obj. 4.

第7圖 胃 癌 (山村コヨシ)

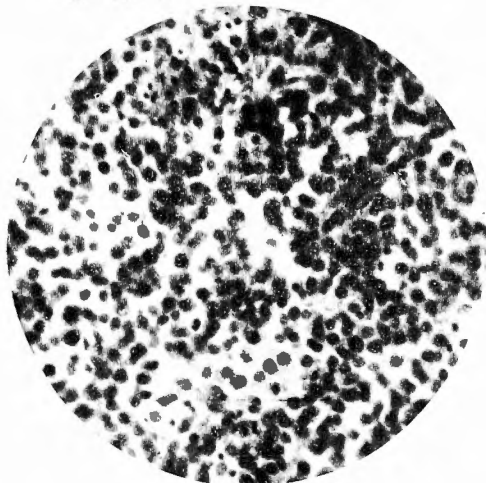


Fig. 7. Magenkrebs.
Leitz Oc. 3, Obj. 6.

第9圖 「エプーリス」 (仙元ツヤ)



Fig. 9. Epulis.
Leitz Oc. 3, Obj. 6.

第8圖 胃癌轉移 (山村コヨシ)

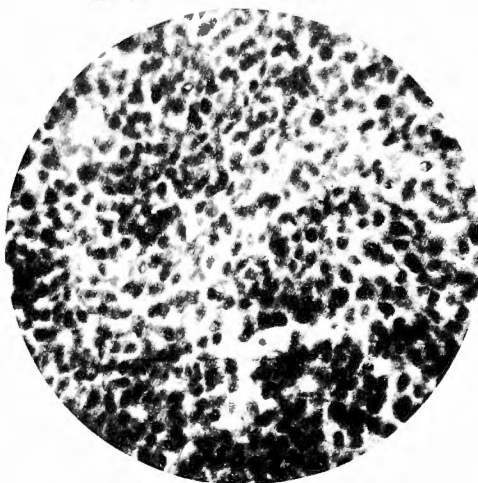


Fig. 8. Metastase des Magenkrebses.
Leitz Oc. 3, Obj. 6.

第10圖 頸腺結核 (岸本キミ)



Fig. 10. Lymphadenitis colli tuberculosa.
Leitz Oc. 3, Obj. 4.

第11圖 結核性副睪丸炎 (今井弘)



Fig. 11. Epididymitis tube
Leitz Oc. 3, Obj. 6.